

エピファネイア

マタイ2章1-12節

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で、決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

説教

いまさらながら気が付いたのですが、年の初めの福音箇所はわたしたちの使用している3年周期の聖書日課では毎年同じ箇所、マタイ2章1-12節を読んでいます。

聖書で東方といえばペルシャを指します。東方の占星術師たちはペルシャ地方からイエス誕生 = ユダヤの王の誕生を知り、礼拝に駆け付けます。彼らは星のしるしを見てこのことを知ったと当時のユダヤの王ヘロデに告げ、イエスはどこにいるのかと訊ねます。王は王宮で誕生することが彼らの常識なのでしょう。ヘロデはメシアの誕生を東方からの客によってはじめて知りました。あわてた？彼はヘロデ付きの宗教学者に問いただしベツレヘムでの誕生預言を東方の占星術師たちに伝えます。彼らはベツレヘムにむかい、また星の導きにより誕生の地についてイエスを礼拝し宝物を渡してヘロデを避けて帰りました。

この出来事はイエス誕生から 12 日後におきたと信じられ、1 月 6 日（日本では祝日ではないのでその日に近い日曜日）はイエスの公現日、エピファネイアと定められています。合理的に考えればイエスの誕生日いつなのかはわかりません。だから公現日もいつだかはわかりません。逆にイースターはイエスの十字架の日は過越しの祭りの時だと聖書に書いてあるので合理的（過越し祭はいつやるかユダヤ教で定まっているので）に理解できます。

イエスは密かに誕生し、そのことをはるか遠くの東方（ペルシャ）は知り、すぐに占星術師たちを派遣し彼らは 12 日後にユダヤに到着した。そして当時のユダヤ王ヘロデにはメシア誕生の詳細をつけずに彼らは逃げるように？国に戻った。

どうしておひざ元のユダヤではメシアの生誕に気づくことができないで遠方の人々には解ったのでしょうか。経験的に当事者である自分はわからないけれど、まわり的人是わかっていてということはよくあります。そんな時はたいがい当事者は誤った選択や、間違った行動をとることが多いようにおもいます。（当事者ヘロデは幼児大虐殺という愚行をおこなったと記録されています）

星の導きによりイエスを見つけた東方からの礼拝者たちは、夢のお告げで別の道を通って国元に帰りました。イエス一家もヨセフの夢に現れた天使のお

告げに従って迅速にエジプトに避難しました。

自分を信じるということばは肯定的な意味でつかわれます。でもきょうの福音では自分を信じるということの大切さではなく、星も導きや、夢のお告げを信じることを教えています。2018年の年初にわたしたちに与えられるこの福音の意味を一人ひとりが深くこころにとどめることができますように。
